

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 — 過去2年間 久世敏雄

昨年、研究経過報告をしなかったため、ここでは、過去2年間の報告をまとめて行なう。

1. 児童の心身発達追跡調査専門委員会および名古屋市教育委員会が主催して、現在、「児童の心身発達の追跡研究」を継続、実施中である。この縦断研究は、名古屋大学名誉教授岸本謙一委員長のもとで昭和39年から始まり、すでに14年を経過している。対象の生徒は、名古屋市内中学1・2年に在学中である。この委員会発足当時の委員長である丸井教授とともに、昭和46年からこの研究に参加している。ここでの研究の一部は、子どもが社会化されていく過程において、母親の愛情と統制がいかにかかわるかに焦点をあてている。幸い、小学校6年間のデータが収集されたので、この結果を近く公表する予定である。なお、この研究に関連した成果はつぎのとおりである。

- (1) 「児童の社会的行動発達に関する縦断的研究」(丸井と共同)教育心理学科紀要 第23巻 昭和51年10月
- (2) 「児童の社会的行動発達について」(丸井と共同)児童の心身発達追跡調査専門委員会・名古屋市教育委員会 昭和51年度報告 昭和52年3月
- (3) 「小学校2年生の社会的行動一達成行動に関する縦断的研究」「児童の社会的行動について」(丸井と共同) 全上 昭和52年度報告 昭和53年3月

2. 青年心理研究の一貫として、現在、「中学生・高校生の社会的態度に関する研究」を継続中である。共同研究者に恵まれ、社会的態度に関する6年間の縦断的研究を行なった。この研究は東北大学宮川知彰教授を代表者とする総合研究「中学校・高等学校生徒の人格形成と学習活動に関する教育心理学的研究(昭和51年度)」の分担研究として、また、愛知学院大学依田新教授を代表者とする総合研究「現代青年理解に関する方法論的検討(とくに昭和52年度)」の分担研究として実施した。この縦断的研究は、なお、ここ1・2年継続する予定で

ある。今後、研究方法の吟味に焦点があてられる。この研究に関連した成果はつぎのとおりである。

- (1) 「中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅲ)」(後藤ほかと共同)教育心理学科紀要 第24巻 昭和52年11月
- (2) 自主シンポジウム『青年の理解とその方法論について』の一貫として「質問紙調査法的アプローチ」教育心理学年報 昭和53年3月
- (3) 「交互作用的接近の検討」現代青年理解のための方法論的検討」研究代表者依田新 現代青年理解に関する方法論的検討 昭和53年5月

3. 青年理解の鍵は、二つの青年期をいかに理解し分析するかであるように思われる。すなわち、高校卒業を境として、モラトリアムを楽しみ、アイデンティティを求めるかにも見える大学生と、アイデンティティ確立を延せざるを得ない高校就職者の二群の青年期の理解である。これらの青年を把握するため、現在、中学生・高校生の進路選択に関する調査、面接を実施する予定である。この研究は、いわゆる「60年代研究」の一貫として行なわれることになる。

4. その他論文および分担執筆はつぎのとおりである。
  - (1) 「幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究」(石黒ほかと共同)教育心理学科紀要 第23巻 昭和51年10月
  - (2) 「発達段階とその特徴」久世、小嶋編 幼児・児童の心理 福村出版 昭和51年11月
  - (3) 「青年期とはなにか」, 「男子青年・女子青年」久世編 青年の心理 福村出版 昭和52年5月
  - (4) 「児童期の親子関係」 柏木・松田ほかと共著 親子関係の心理 有斐閣 昭和53年1月
  - (5) 「青年心理研究の動向(一)」青年心理 第9号 金子書房 昭和53年7月